2023年11月19日（日）　現地説明会資料　発掘ニュース85号

旧門司駅舎跡　発掘調査現地説明会

（公財）北九州市芸術文化振興財団　埋蔵文化財調査室　学芸員　安部和城

●発掘調査の原因：門司港地区複合公共施設建設事業に伴う発掘調査

●調査期間：2023.09.19～11月末頃

●発掘調査によって確認された遺構

明治24年の門司停車場（初代門司駅）開業時に建設されていたとみられる機関車庫（残存長約32.2m・幅約11.7m）や倉庫（危険品庫か）、門司停車場の外郭石垣（一番外側の土台）、機関車庫に並行して設置された鉄管、石炭ガラの廃棄土坑、門司築港以前の護岸石垣と堆積土、2代目駅舎時代の倉庫石垣や石垣側溝などの門司駅関係の遺構が確認されました。

●機関車庫の基礎

調査区の約半分を占める長方形の煉瓦構造物は、煉瓦をイギリス積みで構築したもので、明治30年の構内図との比較から機関車庫であると考えられます。基盤層（岩盤）の上に基礎が構築されている部分では、基礎を設置するための溝を掘削し、強固な基盤層を型枠替わりにして直接コンクリートを流し込む「岩盤仕様の基礎構造」であることが分かりました。これとは異なり、二重の型枠を作り、丸太を使用した胴木（江戸時代の石垣構築に用いられる地盤沈下を防ぐ技術）を設置し、砂利を敷き詰め、型枠を作り、その中にコンクリートを流し込む「低地仕様の基礎構造」となっていることが確認されました。

●門司港と門司停車場の整地土（埋立土）と、門司築港以前の護岸石垣

調査区の東西方向に向かって埋立前の丘陵裾部と門司築港前の護岸石垣が確認されました。土層の観察から、石垣の前面には泥が堆積しており、その上に築港・駅建設時の整地土・埋立土を被せていることが分かりました。

整地土や泥層からは、江戸時代の陶磁器が出土し、特に泥層やその下層からは、土錘（網錘）や古墳時代の須恵器片、平安～鎌倉時代の白磁片や青磁片、中世の瓦片など、さらに古い時代の遺物が出土しています。

●初代門司停車場の外郭石垣と2代目駅舎時代の倉庫土台石垣

調査区の東端にL字に角をもつ花崗岩製の間知石を使用した石垣（石垣2）が確認されました。この石垣の下部から平面が一回り大きな古い時期の石垣（石垣3）が確認されました。

これらの石垣は、明治・大正期の地図との比較から、石垣2が大正3年開業の2代目門司停車場時に建設された倉庫の土台石垣、石垣3が初代門司停車場の外郭石垣と推定されます。

●特徴的な出土遺物たち

鉄道遺跡特有の遺物として、大量の赤煉瓦や、推定：2代目門司駅の転車台紀年銘板（アメリカン・ブリッジ社製）、九州鉄道の社標入り小碗などが出土しています。煉瓦には、生産会社のロゴや管理記号と考えられる「刻印」と呼ばれるスタンプを打ったものが現在8種類確認されており、大阪産の煉瓦も含まれています。この他、一部の刻印は、「▭」→「▭▭」→「▭▭▭」→「▭▭▭▭」のように順番を示している可能性が想定されます。

●おわりに

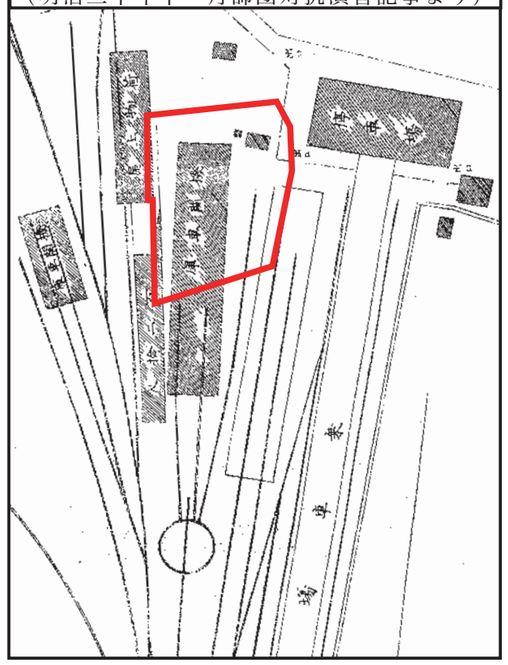
出土した機関車庫の基礎に現れた近世的な「胴木組」と、近代的な「コンクリート」の共存は、「時代の変化」が「土木技術」として、遺構そのものに写し出されたものと考えられます。

機関車庫基礎（岩盤仕様）

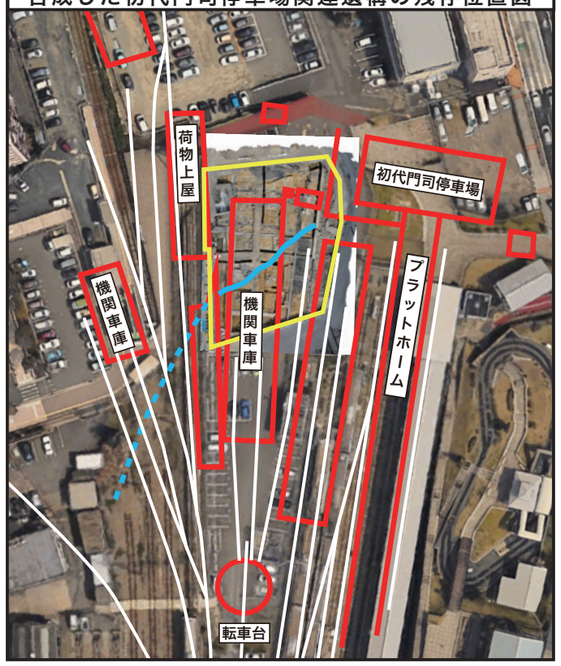
門司築港以前の石垣と門司築港・停車場建築時の埋立・整地土→丘陵裾部から埋立が進んだことが分かる。

門司築港以前の護岸石垣

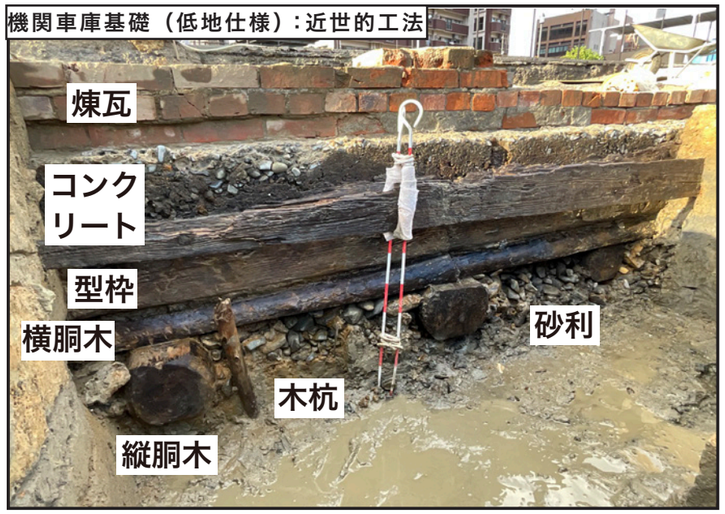
1897（明治30）年の門司駅構内図
（明治三十年十一月師団対抗演習記事より）



調査区（黄色）・明治構内図・Google マップを
合成した初代門司停車場関連遺構の残存位置図

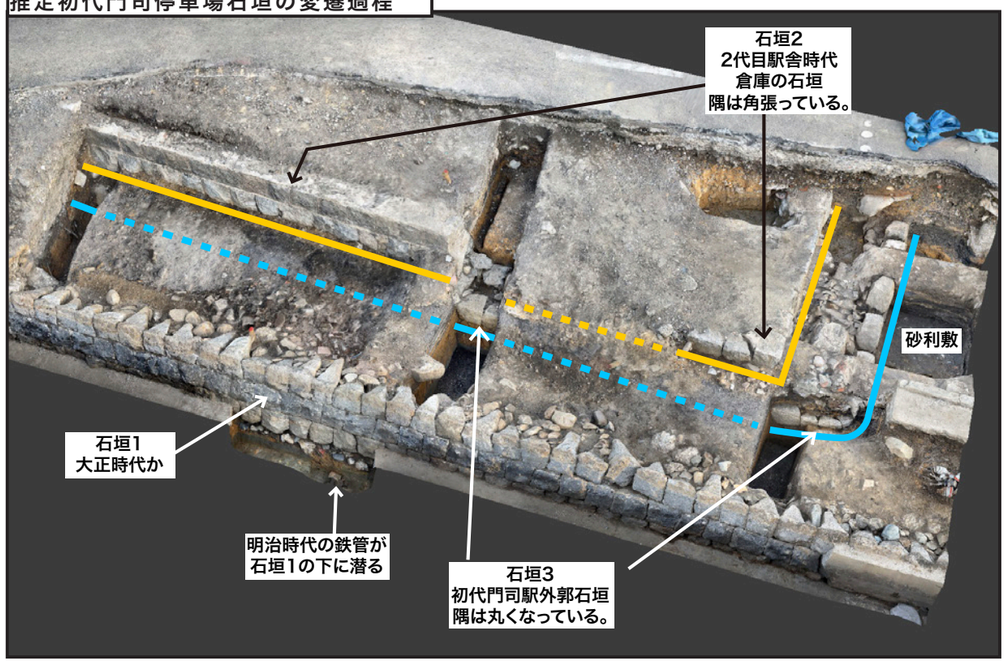


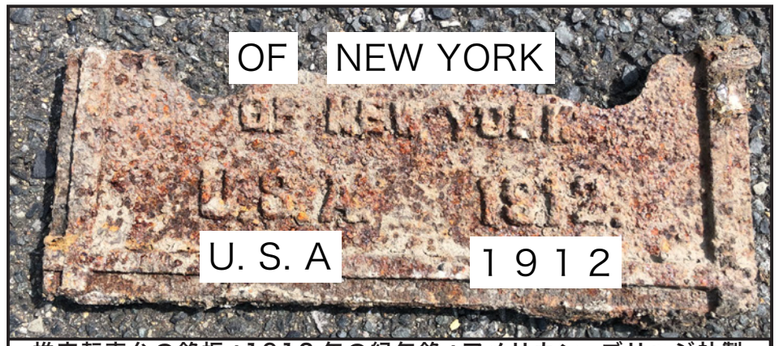
機関車庫基礎（低地仕様）：近世的工法



推定初代門司停車場石垣の隅部分
（石垣下の黄色土は埋立土）角を丸く仕上げている。

推定初代門司停車場石垣の変遷過程



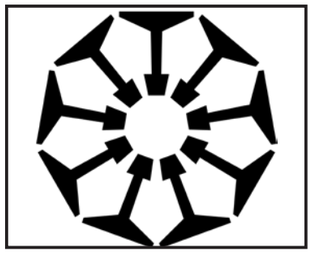


推定転車台の銘板：1912 年の紀年銘：アメリカン・ブリッジ社製

完形のアメリカン・ブリッジ社
記念銘板「みんなでつなげる鉄道１５０年」より

須恵器：古墳時代後期

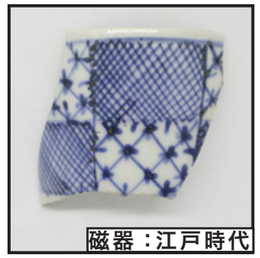
白磁：平安時代



九州鉄道株式会社の社標（Wikipedia より）

九州鉄道の社標入り小碗

青磁：平安～鎌倉時代



磁器：江戸時代

明治時代以前の出土遺物遺物